

失われたアニメ、取り戻されたテキスト

—Faulkner's Introduction to *The Sound and the Fury*—

福田 立明

1 書くこと／読むことのエクスタシー

詩的散文芸術として文学史に特筆されるような小説テキストを産み出す契機は、どんなところにあるのだろうか。それに対する単一の答はないが、文学伝統の先行テキストの影響という外的インパクトと、作者の内的な情緒衝動という二元的な論考の枠組みが考えられる。モダニズム文学では、パロディや引用／引喩の織物からなるモザイク的テキストが書かれるので、前者からの考察が欠かせない面もある。ここで論考対象にしているWilliam C. Faulkner (1897-1963)の代表作*The Sound and the Fury* (1929)についても、外からのインパクトという面では、*Macbeth* (1607) 第5幕の独白に基づく書名はいうに及ばず、John MiltonからThomas Stearns Eliotに至る範例がいくつも示唆されている。¹ だが、ここで焦点を合わせようとしているのは、そのような外的影響力とは対極的方位にある創作者の内面的心情である。

卑近な一例であるが、「なぜアメリカ小説を読むようになったのか？」という問いに対して、「本のなかの女性に恋をしたから」という答が返ってきたとすれば、それは読者の側の内的情動を示すものである。テキストを中間媒体として、作者と読者の情動は情緒的密度と幅にずれはあっても、その性質は近似したものと想定されるので、創作者に「なぜこの本を書いたのか？」と問うときに同様な答が返っても、さほど不思議はないだろう。

この四部構成の小説は、南部の旧家の四人の子どもたちのうち三人の男兄弟の独白からなる三部と、伝統的三人称描写からなる最終部からなっている。ただ上からふたり目の女の子Candace Compson (以下愛称Caddy) には、あきらかにこのサーガ (saga) の中心人物であるにもかかわらず、語りの場が与えられていない。彼女は語る「^{サブジェクト}主体」によりひたすら慕われ、憎まれ、見られ、語られる「^{オブジェクト}対象」である。その理由を問われた解答が、Faulknerのクラス・コンファランスの収録書の冒頭でつぎのように表されている。

“... because Caddy was still to me too beautiful and too moving to reduce her to telling what was going on, that it would be more passionate to see her through somebody else's eyes, I thought.” (Gwynn/Blotner, eds. 1)

作者にとって、Caddyを一語り手にするのは、この「美しく」そして「感動的な」少女を、たんに生起することごとを伝える声におとしめてしまうことにほかならなかったのである。

語られる対象でありながら、語る主体（とその分身）の熱望の眼差しを受け、それを映し返すことで語る者の願望を逆に「語ってしまう」者とは、嬰兒の眼前の母。この作品が、その意識と原初的母親原型「太母」との融合的合一をもっとも激しく希求する幼見的主体としてのBenjyの独白によって始められるのに不思議はない。Erich Neumannの表現を借りれば、太母とのウロボロス的一体性の至福状態からの分離（424-50）にも比すべき悲痛が、この白痴の失われた母親代理(Caddy)との一体的楽園を取り戻そうとする魂の憤激の叫び（the sound and the fury）に声を与え、テキストに題名を与える。独白者がQuentin, Jasonと他の兄弟に移るにつれて、その声は意識化／個性化され、あるいは抑圧／昇華されるが、彼らの独白さえもが、いまでは他者として失われた者との始源的な一体性からの分離がもたらした魂の中心の空洞に響きわたる声となって流出してくる。優れたCaddy論を著したAndré Bleikastenが洞察するように、Caddyは語る主体の無意識の空白の中心を、テキストの空白の中心（“an empty center”——Bleikasten 51）を言説化したものである。それはテキスト生成の潜勢力を秘める胸中のアニマ形姿であり、まさに白紙に投影され、書きすすめられるにつれて絶えず薄れゆくべきものである。

上記のクラス・コンファランスでは、この女性主人公に対する当時の大方の評者たちの否定的な見解に逆らって、素直に彼女を賛美する読者の質問がなされている。その真情が作者にも伝わったのであろうか、彼は創作時にCaddyが“my heart's darling”だったことを認めるに至る（Gwynn/Blotner, eds, 6）。造形された女性形象へのそれよりなお一層あからさまな愛の告白が、*The Sound and the Fury*のフランス語訳版の訳者Maurice Edgar Coindreauによって、作者からの直接の伝聞として伝えられている。おおよそその言葉づかいを書きとめたものとの注釈付きではあるが、「私は作中人物のひとりCaddyに恋をしました。とても愛していたので、彼女に短編小説の持続期間限りの命を与えるという決心がつかねました」という述懐が、その訳書*Le Bruit et la fureur*(Paris: Gallimard, 1938)の“Preface”に引用されている（Coindreau 41）。

読者の私ばかりでなく、創作者もまたみづから創り出した本のなかの女性を、もしくは彼女を創造することを、恋することがあるということ。そのような作者の側の情動のベクトルが、小説テキストを媒体として読者の感情移入機構に作用することにより、テキストの質そのものを決定づけることがあるのは、旺盛な好奇心で他者との情緒的な関わりを求めて生きていくこの魅力溢れる少女の物語を読むエクスタシーを味わった読者には、納得されるにちがいない。みづから「最高の失敗作」(Gwynn/Blotner, eds, 61; Meriwether/Millgate, eds, 146)と呼ぶ作品は、たび重なる試みにもかかわらず作者をすっかりした気分にはしない（Meriwether/Millgate, eds, 244-45）。その思いあまりが当初の情緒的思い入れの激しさを物語っている。

ただし上記のふたつの「告白」は、詩的言語表現への顧慮がいっさい入り込む余地のない日常言語による発話を記録したものである。例えば後者の場合、酒に酔った勢いで作者が訳者の労をねぎらう意図も込めて発した冗談という可能性もまったくないわけではない。私が著者の心情を確かに実感できるようになったのは、本論の副題にある「序文」、*The Sound and the Fury*の結局刊行されることのなかった著者署名入り限定本の企画に寄せた“An Introduction”（以下「序文」と表記）の草稿群の作成から隠蔽、再発見を経て、公刊に至るまでの経過をたどった末のことだった。

2 「序文」草稿と発表の経過

いまでこそ活字印刷物の形で容易に読むことができるこの草稿類も、typescripts（以下tsと略記）の一部は1972年まで、自筆のmanuscripts（以下ms）は1990年までは、ヴァージニア、ミシシッピなど限られた大学図書館で、マイクロフィルム化したものをモニター画面に写し出して判読するほかなかった。英文の本文批評など念頭に置いたこともなかった者に、Faulknerの暗号化されたような自筆手稿がその場で読み解けるはずもなく、後日の解読のためにと持ち帰ったノートに作者自筆の筆跡の模写が残っているのが、いまとなっではいじらしくもある。

この「序文」の存在そのものは、1957年5月から8月までプリンストン大学図書館で開催された展示会“The Literary Career of William Faulkner”のために収集された諸資料に関する同一タイトルの解説書で、James B. Meriwetherが、Random House社（実際はGrabhorn Pressとの共同企画）により1933年に刊行を予定された限定本のために用意されたいという解説を添えて記載したので、研究者間ではつとに知られていた（93）。同書第Ⅱ部「草稿類」中のV. Miscellaneousに分類され、“[Untitled] Introduction to *The Sound and the Fury* [?], typescript, 4pp. (2 – 5)”としてリストされたものが、のちに5頁よりなる“short version”（以下SV）と呼ばれる一完結草稿版の2 – 5頁をなす部分であることが判明する。他のすべての本草稿類がいったんは見失われたのちに（再）発見されるという経過をたどったのに、これだけがヴァージニア大学Alderman Library所蔵のWilliam Faulkner Collectionに所属してアクセス可能だった理由は、論者にも憶測以外の手立てはない。

このSV版の最初の頁のtsは、“long version”（以下LV）と呼ばれることになる10頁分のtsと、17枚にわたる断片的な自筆／タイプ原稿類とともに、現在“The Rowan Oak Papers”（以下ROP）と名づけられている草稿類のなかで発見された。作家の死後7年を経た1970年盛夏、シロアリ防除の準備中に旧邸宅の管理者が、一階フロント・ホールの階段室奥深くに積み上げられていた木箱から1,800枚ほどの未知の草稿類を発見したエピソードは、どこかファラオの墳墓発掘を想起させるような趣がある。アメリカ文学界にとって世紀の発見ともいえるこの出来事への全国的な反応は、しかしながら時経たあとの報道陣への公表後 *New York Times* 紙娯楽欄の小

記事だけだったといわれる。² それは二十年前のノーベル文学賞受賞作家への関心の衰えと、彼の故郷の地理的条件のせいでもあったのだろう。

他方ROPの諸資料のなかでも、とりわけ問題の「序文」に対する研究者の反応はすばやかった。二年後に短い版が“An Introduction for *The Sound and the Fury*”として*The Southern Review*, N. S. 8 (October 1972)に,³ また長いほうの版が“An Introduction to *The Sound and the Fury*”として*Mississippi Quarterly*, 26.3 (Summer 1973)に,⁴ ともに前記Meriwetherの手で公表された。後者の翌年に刊行されたFaulknerの包括的な伝記の著者Joseph Blotnerは、これらのジャーナルからの引用の形をとらずに、LVを“Draft No. 2 of unpub. introduction to *S&F*”とし、SVを同じく“Draft No. 3”として広範囲に言及しながら、作品形成過程の説明に利用している (*Biography* 567-68; 82-83)。ちなみにROPの草稿類は、作家の娘 Mrs. Jill Faulkner Summersの指示により1980年一時的にAlderman LibraryのManuscript Departmentに移管され、公式に目録化された上で、1982年ミシシッピ大学図書館に返還されている。

タイプ草稿に基づく上記二種類の「序文」がいちはやく公表されたのに対して、手筆草稿とその他のタイプ草稿の活字化には、二十年近い歳月を要したが、1990年にPhilip CohenとDoreen Fowlerの共著論文によってROPの「序文」関連資料はほぼ整理され、活字化されるに至っている。⁵

かくしてもはや幻でなくなった「序文」が、1932年暮れのRandom House社の依頼に当初は嫌いやながら応じたFaulknerの手で、長文版完結タイプ草稿 ts J末尾の日付にしたがえば、1933年8月19日に脱稿され (Cohen/Fowler 283)、いずれかの version が24日に同社のBenette Cerfのもとに届けられたものと推定される (Blotner, ed. *Letters* 68-69; 74)。しかしながらGrabhorn Pressとの共同出版計画は結局実ることなく、この原稿は幻の「本」のための「序文」として13年間忘れ去られる。その後の経緯をFaulknerの書簡集から推定すると、読者が初版以来「恋人」と再会する場となるModern Library版 (*As I Lay Dying*との合冊版, 1946)への「序文」として(再)利用すべく同社のファイル中より発掘され、1946年5月下旬に作者の(再)校訂のため返送されたものの、結局「序文」を入れることについて著者から最終的な同意が与えられなかったことが知られる。代わりに出版されて間もない*The Portable Faulkner* (1946)の“Appendix”から“Compson: 1699-1946”と改題した文章を再利用することが合意された (Blotner, ed. *Letters* 235-37)。

こうして通常なら巻末に「付け加え」られるべき「付録」が、^{アペンディクス}当時もっとも多くの読者の手にとられたModern Library版では、巻頭の「序文」の位置に取って代わる。編集者がCompson ^{サーガ}家年代記をせめて「まえがき (Foreword)」へと表題変えしようと抵抗した形跡があるが、作者にそれは「付録」であって「まえがき」ではないのだと一蹴されている (Blotner, ed. *Let-*

ters 228)。Modern Library版の読者も，本文の物語の現在である1928年4月の前後2世紀半にわたるCompson家の前史と後日譚を、「付録」という名の「序文」として「本文」に先立って読むはめになることに，すくなからぬ心地悪さを禁じえないはずである。四次元空間で生起することの真実は，時の経過とともに変わらずにはすまないという真理の相対性をこれにはしなくも示す好例であるが，「新批評（New Criticism）」時代という文学教育大衆化時代に，すくなくとも若い読者層にとってはFaulknerの代表作のstandard editionとなる版を，このような「悪い／間違った」編集方法で編まなければならなかったのはなぜだったのだろうか。大出版社の一流編集者にして，なおうち克ちがたいほど強固な著者の意志が，そこに働いていたからである。

3 言説ジャンル混同の錯誤

Faulknerの伝記や書簡集で一定のスペースを占めるこの「序文」騒動でもっとも私たちの注目を引くのは，自作に対するまぎれもない心情の吐露を綴る旧稿を他人の目から守り通そうとする著者の意志の堅固さである。1946年5月「序文」旧稿の発見と著者への返送を伝えるRobert N. Linscottの書簡に対して，彼は“what smug false sentimental windy shit”と形容詞を四つ重ねて呪い，この「駄文」を人目に触れる危険から救えるものなら，Random House社が支払ってくれた稿料を二倍にして返してもいい，と答えている（Blotner, ed. *Letters* 235-36）。階段下のクローゼットという暗闇に，いったんは安全に葬り去った遺稿を暴く者に禍あれ。とはいえここまで「序文」の細部に入るのをためらい，つたない「まえがき」を書きつらねているのは，かならずしも作家の亡魂を慮るためだけではない。そこには，「詩的言説」（もしくは芸術的ディスコース）と日常的言説の対立という文学／批評テキストの基本的な問題が関わっているからである。

すでに初期稿のひとつと目される手筆草稿断片ms Aにおいて，小説家が書く序文は半分くらいフィクションそのものだ，と断っており（Cohen/Fowler 272），それはFaulknerの「序文」そのものについても，CohenとFowlerが例証するように当たっているのだろう（268-69）。そういう彼の信念と，Linscott宛書簡で述べた，本というものはそれ固有の“prologue epilogue introduction preface argument”などの全体から成っているのだ，という主張とを併せて考えてみよ（Blotner, ed. *Letters* 236-37）。そうすれば，作者みづから詩的言語で構築した芸術的ディスコースを，彼にとっては日常言語にほかならぬ批評的言説によって説明し直すことに，どれほどの違和感を感じ，絶望をもしていたかがしのばれよう。Faulknerの会見記での発言は，すべての公的な発言とともにこのような絶望の果てからなされたのであってみれば，そえを文学テキスト解釈の論拠に利用するのは，ジャンル混同の錯誤を犯すことにほかならず，その意味では筆者もまた同断。

実は拙文を綴るひとつの契機は，それと同様なひとつの「錯誤」をFaulkner自身が「序文」

で犯していることに気づいたからである。要約すれば、SVにおいて、書くことの情緒的昂揚感あるいは陶酔感^{エクスタシー}という点で、*The Sound and the Fury* が他の自作といかに違っていたかを説いたあと、その結末に「妹がなく、わが娘を幼くして失うのを宿命づけられた私は、そこで自分のためにひとりの美しくて悲劇的な少女を創り出すのに取りかかった」(ts G 5; Cohen/Fowler 710) と書き記したのを境に、その継続部として対応するとも考えられる ts H 3 頁中段 (Cohen/Fowler 280) あるいは LV 完結稿 ts J, 5 頁の下段 (Meriwether, ed. *Miss. Quarterly* 413) から、彼のペンは小川での水かけエピソードに始まる小説テキストの領域へとさまよい戻るかのようにみえる。

「序文」には詩と同じくらい苦心して取り組みました、という同原稿送付の書簡に添え書きされた告白は、それが自作の詩的テキストに関する二次テキストの作成であるにもかかわらず、もとの詩的昂揚感が言説化されていくことを暗示しており、その創作行為にこめられた情緒的負荷の大きさを物語っている (Blotner, ed. *Letters* 74)。4 年後になお原テキストについて「序文」を書くという行為そのものが契機となって、もとの詩的昂揚感が再燃する潜勢力を保ちつけていたのである。だが「詩と同じくらい苦心して」書いたテキストは、本来詩的エクスタシーがあるべきでない二次テキストであった。そこにこめられていた情動の軌跡は、13年後にあらためて再読されると、著者には公表拒否の口実にするのに十分なほど「感傷的で空虚な駄文 (sentimental windy shit)」と化するのである。

これが Caddy だった、と小説の核心をなす女性の固有名詞を明記した手書草稿 ms E では、この女性に「私を感じうるすべて」を包括するために三人の兄弟を与えたことが明かされる (Cohen/Fowler 277)。つまり三位相における語る主体の——幼児 (Benjy) の、恋人 (Quentin) の、そして父親 (ここでは Caddy の娘 Miss Quentin に対する Jason) の——それぞれ近親的関係の中核にある「他者」たる女性への情念が語られる。⁶ 心気症の Caroline Compson 夫人が事実上空席のままにした母の座、家庭の中心の空白を埋めるべき者として、Caddy (とその代理者たる Miss Quentin) は、語り手の男性「主体」の欲望、コンプレックス、嫉妬、憎悪など、さまざまな情念が投影される「対象」としての形象化である。それは、妹がなく「序文」執筆直前に得た次女のまえに娘を幼くして失うことが宿命づけられていた作家自身にとっても、こころの空白の中心に彷彿とするひとつの女性心象^{アニマ}を記号表現により言表化する試みにほかならなかったのである。

詩的表現行為を、女性の体内の空白の中心から生命体が生ずる (母親化) のに対応させて、主体の無意識の抑圧/空白の中心から象徴言語が表出するプロセスと仮定するすることが認められれば、ここで論考対象とする両テキストは、多様な問題提起をはらんでいるといえよう。Caddy は、単に性的女性存在として主体の「抑圧の再帰」(Kartiganer, "Intro," x) であるにとどまらず、作者の濃密な詩的陶酔のうちに表出されたなまなましい心理と肉体を伴う存在感を

帯びるに至っている。彼女と語り手の、さらには男性作者という主体のあいだには、合一と分離、肉体と言語、沈黙と発話、現実界と記号象徴体系などの二項対立とその弁証法が絡み合わされており、それがFaulknerのテキストから、近年になってなお記号論／心理学／女性論からの読みと解釈の豊かな成果を産出させ続けるもとになっていると思われる。

しかしながらCaddyは、主体の眼差しを受ける対象ではありながら、これら二項対立のもっぱら前項側だけにある女性人物像にとどまることはけっしてない。例えば第一部クリスマス前々日の寒い日のエピソードで、凍りついた川面の氷（“the top of the water”）を割った小学生のCaddyは、言語という記号象徴体系の世界にまったくは入ることのない幼いBenjyの心に“ice”という記号をインプットしようとして、「ほら、こおり、どんなに寒いかってことなのよ。」と語る（ML 32-33）。物質名詞という記号論的水準の言葉ではあっても、「母」は言葉をも与える存在である。この少女の言葉を書き記すことが、失われた母／妹としての、主体の空白の中心に、声を与える。男性主体の女性的たましいのイメージであるマニア像におけるアニムス発現に、男性性と女性性の、そして創作者と作中人物の、複雑な弁証法的交渉が思いめぐらされる。

なぜならCaddyは、死にいく老女（祖母）の喪葬を覗き見る樹上の少女として心象化されるからである（Meriwether／Millgate, eds. 245）。すでに発端において、彼女の男兄弟が持たない勇気と好奇心という形で主体のアニムスが投影される対象である。ウロボロス／太母的老女の死によって初めて形成されるアニマの乙女像は、それにもかかわらずイヴ的原型イメージと汚れたパンツの象徴性により超人間的、動物的な特徴をも残している。滅びゆく南部家父長制社会の主体の意識が囚われのアニマ像を救い出し、再統合を果たし終えることがないのは、三兄弟（語りの順）がそれぞれ性器、生命、金を失うという去勢的結末を迎えることによって示される。⁷ 第二次大戦直後当時の読者が、“Appendix”において「文字通りの悪の権化」で「死の化身にはほかならない」(Fowler 17) ナチ・ドイツ軍参謀将官と肩を並べる写真像としてCaddyを最後に一瞥するとき、彼女がふたたび囚われの女性形象と化しているのを感じとることであろう。主体のアニマは、女性像として言表されることにより客体化され、そのころから失われなければならない。

4 取り戻されたテキスト

さきに引用した大学での質疑応答のなかで、Caddyをナチの手中から救い出す可能性について、そんなことをすれば、なにかつまらない、クライマックス感に欠けたものになり、彼女を裏切ることになると、作者は答えている（Gwynn／Blotner, eds. 1）。それは初めから、妹がなく、わが娘を幼くして失うのを宿命づけられた作者が非在からこしらえあげた虚像だからというばかりではない。彼女が歴史的にしか、あるいは伝説的にしか存在しないRosa Millardのような「南部貴婦人」の現代における陰画的エムブレムであるという意味でも、失われなければな

らないのだ。戦い破れてその農本主義的貴族社会の栄光を失い、第一次世界大戦を経て文化的「荒地」と化した、これも二重の意味で失われた南部には、もはや作者にとって凜とした（勇敢な、という形容詞で表せば作者の言葉にもっとも近づくが）南部女性を容れる余地を持たないこと、そのような表象的女性がいま（1945年）では本来の故郷南部を追われ、パリの高級娼婦としてドイツ占領軍人と並んで撮られたCaddyの写真像としてしか存在しえないことを認めていたからである。生命力に溢れた蠱感的なアニメ形姿は、こうして現代アメリカ南部からパリへと脱領域化され、彼の創作テキストもまた伝統的南部ロマン主義文学からモダニズム小説へと脱領域化されねばならなかった。

それでもなおこの小説執筆時だけに作者を包んだ女性形象が、良くも悪くも現代の南部という「荒地」を生き抜けようとする者の個性化を導くアニメとして、三部構成のモノログ小説を紡ぎ出させる。そこ（第3部）までは私は本（物語）のなかにいた、とms E (Cohen/Fowler 278)で作者はいう。mss E, Fとtss H, Jとでは、物語を印刷できると感じた段階についての記述に異同があるが、読者の物語理解のためには自分が本から完全に外へ抜け出なければならぬことがわかった。それでもペンを執って“The day dawned bleak and chill (ML 281).”と、第4部を書き始める決心をするのにひと月あまりもかかったと記している (ms F; ts H 7; Cohen/Fowler 278, 282)。この時間こそ、ほかの小説にはまったくなく、“Benjy’s Section”執筆中に感じたという「あの（初めの）エクスタシー」(mss D, E; tss H 6, J 8; Cohen/Fowler 275, 276, 282; Meriwether, ed. *Miss. Quarterly* 414)が、第4部の三人称話法を書くまで鎮静化するのに要した最小の時間だったのである。“Appendix”へと17年間もかけて鎮めねばならなかった詩的陶醉を、わずか4年後の「序文」執筆時にその名残もないかのごとく批評言語で脱明させられる苦痛が思いしのばれる。

前述のフランス語版の訳者によれば、原作者はこの書を「私の狂気と憎悪の陰鬱な物語」として言及したという (Coindreau 42)。わが子を見るためはるばる郷里の町に戻ったCaddyにJasonが走り去る車の窓越しにしかその姿を見るのを許さなかった場面についての質問に、作家がそれを書くのはお涙頂戴のためばかりではなく、「人間の人に対する不正の一例を書くのです」と答えている。この本は、そのあとで人間性肯定の発言をつけ加える熟年の作家によって書かれたのではない。「人は人に対してとかく不正なものになる」(Gwynn/Blotner, eds, 148)ことを信じた、二重の意味で失われた現代南部の若い「失われた世代」の作家によって書かれたものである。この書でFaulknerがCoindreauのいうように、人間存在の「地獄の門」(42)を開いたのだとすれば、彼の*Inferno*において、これもまたネガティブなBeatriceの役割を果たすCaddyが作者の情念の対象になるのは、ごく自然な成り行きだったのだろう。

モダニズムの記念碑的小説の発表後作家への最初の余波として、「序文」は彼の初めの予感通りの困惑を与える。彼が受け取るはずの750ドルのうちサイン料分250ドルは、著者署名つき限定版

の出版計画挫折によって支払いを受けることはなかった。もしも計画が実現していたら、「私は序文を書くなどということには用がない」(Blotner, ed. *Letters* 236) 男だという悔恨の思いをいつまでも味わうはめになっていたことは、想像に難くない。

「本」のない「序文」は、最後に用意されようとした場所を「あとがき (“Appendix”）」によって盗み取られる。著者は稿料を二倍にして返すことはしなかったが、鮮烈なイメージと情緒的喚起力を帯びた小説の創作の秘密を漏らす原稿が取り戻され、公の目に触れるおそれは二度とないと確信したにちがいない。しかし、いったん売買契約されて市場へと発信されたテキストは、発信者のもとへ誤返送され、私的な創作行為の秘密をばらすものとして隠蔽されても、いつれ宛先人／読者に配達されるべきものとなるのである。

注

- 1 テキストは “Appendix Compson: 1699 – 1945” 所載のつぎの版を使った。ここからの引用はMLと頁数の括弧つき引証付記で示す。

The Sound and the Fury & As I Lay Dying (1929, 1930; New York: Modern Library/Random House, 1946).

先行作品の影響について一例ずつ挙げれば、Miltonについては、Hall 35–62. Eliot については、Adams 231–33.

- 2 “The papers were found last summer by an English department official in Faulkner’s home...” (qtd. in Kinney and Fowler 327 as from *New York Times*, Monday, Jan. 10, 1972, 26 : 1) という新聞記事が正しければ、発見日時は一年遅くなるが、同記事を全文引用するROPの調査記録 (Kinney and Fowler, 1983) の共著者のひとりも、のちの共著論文では1970年説をとっており、ここでもこれにしたがう (Cohen and Fowler, 1990, 262)。ROPの “Rose of Lebanon” 草稿を掲載した下記雑誌の関連記事 “Finding Lebanon” も参照。 *The Oxford American* (May/June 1995): 4,
- 3 ROPに含まれる表題の付されていない ts, 1 p. (1の頁記号付き、後記分類表の ts G) と、前記 Alderman Library所蔵の ts 4 pp. (pp. 2–{5}), William Faulkner Collectin ; Accession 6074, Item IA : V–1 (M819) とを関連づけ、“short version” としてまとめた版。
- 4 ROPのなかのほぼ完成稿と想定される著者署名・表題つきの ts, 10pp. 注5分類表の ts Jに当たる。James B. Meriwether, ed., *A Faulkner Miscellany* (Jackson, Miss. :UP of Mississippi, 1974) 156–61に再録されている。
- 5 この共著論文では、「序文」手筆／タイプ草稿類はAからJの10種類に分類されているが、私の調査結果とも照合しながら一覧表の形で表示しておく。すべて Rowan Oak Papers, Faulkner Collection, University of Mississippiの所蔵資料である。

- ms A, 1 p. :Box 1, Folder 2 : 自筆手書草稿未完結頁
 ms B, 1 p. :Box 1, Folder 2 : 同上
 ms C, 1 p. :Box 1, Folder 2 : 同上
 ms D, 1 p. :Box 1, Folder 2 : 自筆手書草稿完結頁
 ms E, 1 p. :Box 2, Folder 39 : 同上
 ms F, 1 p. :Box 1, Folder 2 : 自筆手書草稿未完結頁
 ts G, 1 p. :Box 1, Folder 2 : タイプ草稿未完結SV版
 ts H, 8 pp. :Box 1, Folder 2 : タイプ草稿の短い完結LV版
 ts I, 3 pp. :Box 1, Folder 2 : タイプ草稿未完結LV版
 ts J, 10pp. :Box 3, Folder 50 : タイプ草稿の長い完結LV版

共著論文には, mss A, B, C, D, E, Fと ts Hとが活字化したテキストとして付されている。それ以外では, ts GがSVの1頁として *Southern Review*に, ts Jが *Mississippi Quarterly*に, とともに前述のように発表済みなので, ts Jの初めの3頁と酷似するとして共著者により省かれた ts I 以外のすべての現存資料が, いまではどこにいても読むことができるようになった。

- 6 Compson家三兄弟に Freudの id, ego, superegoの三要素を指摘した Carvel Collins の論文は「序文」発表前の著作であるが, 「序文」と類似した観点があるのが注目される (35-56)。
 7 三兄弟の象徴的去勢については, 言語と言述(discourse) のレベルとの関連で論じた Deborah Clarke の論文 (esp. 66-70) 参照。

Works Cited

- Adams, Richard P. *Faulkner: Myth and Motion*. Princeton: Princeton UP, 1968.
 Bleikasten, André. *The Most Splendid Failure: Faulkner's The Sound and the Fury*. Bloomington and London: Indiana UP, 1976.
 ---, ed. *William Faulkner's The Sound and the Fury: A Critical Casebook*. New York : Garland, 1982.
 Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. 2 vols. New York: Random House, 1974.
 ---, ed. *Selected Letters of William Faulkner*. New York: Random House, 1977.
 Clarke, Deborah. "Of Mothers, Robbery, and Language: Faulkner and *The Sound and the Fury*." Kartiganer, Donald M. and Ann J. Abadie, eds. *Faulkner and Psychology*. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 56-77.
 Cohen, Philip, and Doreen Fowler. "Faulkner's Introduction to *The Sound and the Fury*." *American Literature* 62.2 (1990) : 263-83.

- Coindreau, Maurice Edgar. *The Time of William Faulkner*. Ed. and trans. George McMillan Reeves. Columbia, S. C. :U of South Carolina P, 1971.
- Collins, Carvel. "The Interior Monologues of *The Sound and the Fury*." *English Institute Essays*, 1952. New York: Columbia UP, 1953. 29–56.
- Deleuze, Gilles and Ferix Guattari. *Kafka: Pour une littérature mineure*. Paris: Les Editions de Minuit, 1975. 宇波彰／岩田行一訳『カフカ——マイナー文学のために』法政大学出版局 1978年。
- Faulkner, William. *The Sound and the Fury & As I Lay Dying*. New York: Modern Library—Random House, 1946.
- . A Draft Introduction to *The Sound and the Fury*. Ts, 4 pp. (2 –{5}). William Faulkner Collection, Accession #6074, Item IA;V – 1 (M–819). Alderman Lib., U of Virginia, Charlottesville, Va.
- . Versions of An Introduction to *The Sound and the Fury*. Mss. and tss. William Faulkner Collection, Rowan Oak Papers, Accession #9817–H, Item 20; Box 1, Folder 2; Box 2, Folder 39 and 50. U of Mississippi Lib., University, Miss. See Meriwether, ed. "Finding of Lebanon," Letter from the Editor. *Oxford American* (May–June 1995) : 4 – 5.
- Fowler, Doreen. " 'Little Sister Death' :*The Sound and the Fury* and the Denied Unconscious." *Faulkner and Psychology*. 3–20.
- Gwynn, Frederick L. and Joseph Blotner, eds. *Faulkner in the University:Class Conferences at the University of Virginia 1957–1958*. 1959. New York: Vintage– Random House, 1965.
- Hall, Constance Hill. *Incest in Faulkner: A Metaphor for the Fall*. Ann Arbor: UMI Research P, 1986.
- Irwin, John T. *Doubling and Incest/Repetition and Revenge:A Speculative Reading of Faulkner*. Baltimore and London : Johns Hopkins UP, 1975.
- Kartiganer, Donald M. and Ann J. Abadie, eds. *Faulkner and Psychology: Faulkner and Yoknapatawpha, 1991*. Jackson: UP of Mississippi, 1994.
- Kartiganer, Donald M. "Introduction." *Faulkner and Psychology*. vii–xvi.
- Kinney, Arthur F. and Doreen Fowler. "Faulkner's Rowan Oak Papers: A Census." *Journal of Modern Literature* 10.2 (1983) : 327–34.
- Meriwether, James B. *The Literary Career of William Faulkner*. 1961. Columbia, S. C. :U of South Carolina P, 1971.
- Meriwether, James B. and Michael Millgate, eds. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926–1962*. New York: Random House, 1968.

Meriwether, James B., ed. "An Introduction for *The Sound and the Fury*." *Southern Review*,
N.S. 8 (1972) : 705-10.

——, ed. "An Introduction to *The Sound and the Fury*." *Mississippi Quarterly* 26.3 (Summer
1973) : 410-15.

Neumann, Erich. *Ursprungsgeschichte des Bewusstseins*. Olten: Walter-Verlage, 1971. 林道義
訳『意識の起源史』上・下巻 紀伊国屋書店 1984-85年。

Synopsis

The Lost *Anima* and the Recovered Text :
Faulkner's Introduction to *The Sound and the Fury*

Tatsuaki Fukuda

A text of fiction charged with the author's own intense psychic involvement in his fictional character is supposed to evoke in the mind of the reader an equivalent response to him/her. Caddy Compson of *The Sound and the Fury* (1929) impresses many readers with rich capacity for affection and compassion. As William Faulkner once declared in a class conference that she was his "heart's darling," so the reader might find himself fascinated by her.

Unlike the other Compson children who play the fundamental role of subject and monologist each in the first three sections, only Caddy, deprived of narrative voice, remains an object to be seen, to be missed, and to be hated by her brothers, or in Bleikasten's expression, makes up "an empty center" of the text. In trying to fill the void, the author who had no sister and was destined to lose his first daughter in infancy creates instead a fictional little girl, upon whom he projects his subconscious desires. She is the personification of his own *anima*.

In this essay I try to note the intensity of the author's emotional involvement in the created character, and understand the reason why he rejected publication of his "Introduction to *The Sound and the Fury*" and attempted to conceal all its related draft materials in the closet. I hope to throw light on this question by a brief textual review of the materials which have been published in certain different steps after their discovery.

In the meantime, Faulkner's correspondence and biographical evidences enable us to draw conclusions that the author wrote the "Introduction" with reluctance at first, sending the final version to Random House in August 1933 for their proposed limited edition of *The Sound and the Fury*: that the typescript sent for the finally abortive project had been lost until the publisher found it in 1946 and returned it to the author to rewrite it for the Modern Library combined edition of *The Sound and the Fury* and *As I Lay Dying*; and that Faulkner finally did not agree and offered instead the "Appendix: Compson: 1699-1945" from the recently published *The Portable Faulkner* (1946). Consequently Faulkner readers got a strange book with the "Appendix" taking the place of "Introduction" in the first pages.

The development of the matter clearly shows Faulkner's indomitable will to keep from the public eye the "Introduction" he wrote thirteen years ago working "on it a good deal, like on a poem almost." His poetic inclination betrays itself even in writing an introduction to his own book that is supposed to be done in non-poetic discourse.

By comparing the draft papers, one may find the traces of excision that seemed to the writer to be revealing too much about his emotional involvement as well as the ecstasy he experienced during his creative labor.

Caddy, thus portrayed in the ecstasy to be a contemporary negative emblem of the historically lost Southern Lady, expatriates herself to be a Paris courtesan and, just like the *anima* to be exorcised from the author's psyche by artistic projection, must be lost forever to the South. The texts of "Introduction," which the author supposes threaten to reveal too much about the secret of his artistic creation, were once believed to have been hidden safely in the closet. But a text addressed to the reader and paid for its circulation, is in the end to be recovered by the addressee.